

## 英領インドにおける二重生活 — キプリングの「教会の承認なしに」を例として

上 石 実加子

### 目 次

1. はじめに
2. “heaven-borns”と呼ばれたインド植民地官僚
3. 「ユーラシアン」である息子トウタ
4. 国策としてのメモサーヒブ
5. アミーラのインディアンネス
6. おわりに

### 1. はじめに

キプリングの短編「教会の承認なしに」(“Without Benefit of Clergy”)は、英領インドにおいて英国人青年ホールデンが、16歳のインド人女性アミーラと恋に落ちるが、その束の間の幸福は「内的にも外的にも、文化的な不一致によって壊れて」(Meyers, 8)しまうアイロニーを描いたものである。

タイトルが示す“benefit of clergy”の原義は、聖職者が罪を犯したとき、通常の裁判所ではなく教会内で審判を受けられる「聖職者の特権」のことであり (Islam, 40)、この聖職者の裁判特権は、転じて、教会で聖職者が行う結婚の儀式としての「教会の承認」を意味するようになった。キプリングのこの作品は、こうした「教会の承認なしに」結婚したホールデンの二重生活とその顛末を記したものであるといえる。

本論は、キプリングの「教会の承認なしに」を例として、英領インドに配属された英国人

官吏の二重生活から、「教会の承認なしに」結ばれたふたりを取り囲む様々な社会的圧力を考察すると共に、彼らの「愛が社会を超越した象徴とはならない」(Annan, 110)この意味を作品から紐解いていきたい。

### 2. “heaven-borns”と呼ばれたインド植民地官僚

ホールデンが門番のピル・カーンから“heaven-born”と呼びかけられる場面が二箇所ある。アミーラが無事に出産を終えたところに帰宅したホールデンが、ピル・カーンから、子どもの運命を守るためには「誕生のいけにえ」の儀式が必要だと勧められ、言われるままにヤギを殺めたときと、もうひとつは、黒コレラが蔓延し、ホールデンが仕事でしばらくアミーラに会うことができずにいたとき、これもやはりピル・カーンから、彼女のために早く家に帰るようにと呼びかけられる場面である。

この“heaven-born”については、本田毅彦『インド植民地官僚』において、元インド高等文官が、かつて人々から“heaven-borns”と呼ばれていたことをBBCのラジオ番組の中で話したことが紹介されている。「天から生まれた人」と呼ばれることを、在印英国人官僚の大半が「そう呼ばれるのにふさわしい存在なのだと考えていた」(本田, 26-27)というが、この支配階級は、「イギリス人がインドに

いた間、常時 1000 人を超えることは決してなく、本国の官僚たちに比べてはるかに大きな権力を行使していた」(本田, 27)と説明されている。ホールデンの身分は物語の中で明らかにされていないため、批評家たちは、彼を「下級のイギリス文官 minor English civil servant」(Bloom, 51) や、「英国人官吏 English official」(Wilson, 26), 「在印英国人行政官 Anglo-Indian administrator」(Harrison, 63) などとして表現しているが、インド現地(1)の統治システムは、インド副王兼総督を頂点として文官部門と武官部門に分かれ、両部門の要所要所がイギリス人のみから成るエリート・カードルが占める構造になっていた。文官部門のエリート官僚制度を構成しているのが、インド高等文官 (Indian Civil Servant) であった。“heaven-born” とピル・カーンから呼ばれるホールデンは、少なくともこうしたエリート・カードルに属していたといえる。(2)特にイギリス人官吏の場合、イギリス人たちは支配者側でありながら極端な少数派であったため、「社会的、心理的な孤独感に苦しむことが多かった」(本田, 141)とされ、「インドに配属されたイギリス人独身男性がインドの愛人を持っていた」(ヒューズ, 130)ことは、インド人社会において孤絶した存在であった彼らにあって何ら不思議なことではなかった。

ホールデンは旧市街のはずれにアミーラとその母親のために小さな家を借りる。「ほとんど何にも代え難い愛しいものとして」ホールデンの目に映っていた 16 歳のアミーラは、ホールデンを孤独から解放し、そこはいつしか彼の家庭となっていく。彼の二重生活の始まりである。部屋の中は、寝室の調度品類、赤い漆塗りの長椅子、フロア・クロスやクッションなど、現地産のコレクションが完璧に揃えられていた。アミーラは最高の衣服を身につけ、ダイヤモンドの鼻飾り、額にはエメラルドやルビーの装飾品、金のネックレス、

銀のアンクレット、翡翠色のモスリンのガウンを身につけている様子が詳細に描かれている。貧しい身の上の彼女が、ホールデンの手によって色鮮やかに輝いて気品にあふれ、非常に幸福である様子がわかる。ホールデンにとって「公的な生活を義務付けている日常業務よりもアミーラとのプライベートの生活のほうがずっと魅力的で報いのあるもの」(Ricketts, 174)であったと想像することは容易である。

だが、現場での 2 週間にわたる任務を終えて戻ってきたホールデンは、真っ先にアミーラのもとへ帰らずに、クラブに立ち寄るという行動に出る。そこで 2 時間も時間を費やしている。また、子どもが生まれた直後、アミーラを見舞ったホールデンは、中庭に出るとピル・カーンに呼びとめられて、子どもの運命を守るためにと「誕生のいけにえ」の儀式を勧められる。ヤギを殺めたあと動揺の色を隠せなかったホールデンがそのとき思っていたのが、「クラブに行って心を落ち着けよう」ということであった。冷静になるために、彼が本能的に向かったのがクラブであったことになる。彼には「同国人たちが集う慣例の場が依然として必要」(Harrison, 47)であったことがここに示唆されている。

クラブは英国人向け邸宅の敷地内にそれぞれ設立され、本国の階級体制に基づいた入念な規則により成り立っていた (Gilbert, 1972; 24)。インドにおいて不自然なまでに彼らがイングリッシュネスを維持していた場所である。クラブ内でメンバーたちは、比較的寛いだ雰囲気の中で、微妙な問題について議論することもできた。クラブでの社交生活の魅力はそこで提供される娯楽であった。テニスやビリヤードなどである。ホールデンも、いけにえの儀式のあと、ヤギの血がついたままの乗馬靴でクラブへと急ぐ。始まっていたビリヤードのゲームに割り込み、運河建設についての情報交換をしたりして男たちと談笑する

ことで、彼はやっと気を落ち着けていく。アミーラとの愛に満ちた生活がホールデンに動揺を与える理由は、彼らを取り巻く様々な社会的な圧力によるものと考えられるのである。

### 3. 「ユーラシアン」である息子トウタ

ホールデンが、アミーラとの平和な生活をかき乱されることになるのは、二人の間に息子という第三者が誕生したことであったと説明されている。それまで息子の存在を自分のものとして実感していなかったホールデンがある意味で初めてそれを自覚した瞬間、それが、ある暑い日の夕方に、アミーラと息子トウタと共に屋上で凧揚げ合戦を見物していたとき、ホールデンがトウタの発言に息を詰まらせる以下の場面がある。

... he demanded a kite of his own with Pir Khan to fly it, because he had a fear of dealing with anything larger than himself, and when Holden called him a 'spark,' he rose to his feet and answered slowly in defence of his new-found individuality, '*Hum* park nahin hai. *Hum admi hai* [I am no spark, but a man].'

The protest made Holden choke and devote himself very seriously to a consideration of Tota's future. (Kipling, 2001; 223)

自分の身体よりも大きな凧を扱うのが怖いトウタは、自分用の凧をピル・カーンに揚げてほしいとせがむのだが、そんなトウタの様子を見て、ホールデンが「おしゃまん」と呼ぶと、トウタが「僕はおしゃまんなんかじゃない、男なんだ」と「自分が新たに見出した個性を弁護して」答えたことに、彼は息を詰まらせる。その理由は、引用にあるよう

に、「トウタの将来を真剣に考えるようになった」からとしか説明されていない。

トウタは、英語で話しかける父親の話を理解しつつ、ヒンディー語でそれに答えているのが引用からわかるが、彼は、英国人であるホールデンとインド人であるアミーラとの間に生まれた混血のインド人であり、「ヴィクトリア朝時代にはユーラシアンと呼ばれていた」(ハイアム, 156)。この“Eurasian”は、特に英国人の父親とアジア人の母親から生まれた混血児を指し、19世紀インドにおいてはしばしば欧亜混血の蔑称とされてきた。「ユーラシアン」としてのトウタの将来を思っただけでなく、ホールデンが息を詰まらせるこの時代の背景を、少し時代を遡って考えたい。

17世紀から18世紀の後半までは、英領インドにおいて、特に帝国の統治機構の上層部に位置する者たちが現地的女性との間に内縁関係を結ぶことが慣行として定着していた。東インド会社は軍の拡大を目的として異人種間の結婚を奨励する政策を意図的に採用したと言われており、こうした営みが公然と支持されてきたことを裏付けている。1700年代中ごろまでには、インドにいる約90パーセントの英国人が、こうした結婚をしていたと推測されている。異人種間の結婚は、この当時、英国人とインド人のエリート間に生まれたお互いの友好関係を示すひとつの象徴ともいえるものであった。

だが、コーンウォリス総督による大規模な社会浄化運動を契機として、英印間における社会的にも性的にも親密な関係は、全く逆の方向に向かうことになった。コーンウォリスは、背徳と墮落の申し子であるとしてユーラシアンに嫌悪感を抱き、彼らを根絶することによって社会の浄化を促進させようとした。さらに18世紀後半にインドに渡りはじめてきた福音主義を掲げるプロテスタントの宣教師たちが、キリスト教布教活動のもとで、英国人とインド人の結びつきに不賛成の意を示

していく。さらに、当時フランス領であったカリブ海沿岸の島サントドミンゴで、1791年に起きた暴動に、フランス人と現地人の混血の男たちが参画していたとの報告がなされ、インドにおいて同様のことをユーラシアンが引き起こすのではないかという恐怖が英国人の間に広まることになる (McBratney, 60)。かくしてユーラシアンたちは、東インド会社における文武の官職に就くことを禁じられ、職業的には官僚よりも下位に属し、社会的には職権を行使できる地位から排除され、周縁に置かれることになったのである。

ユーラシアンであるトウタは、ゆえに将来、父親であるホールデンと同じ職業地位にはなれず、さらに、イギリスの法のもとでは、母親であるアミーラがキリスト教に改宗しない限り非嫡出子となる。物語のタイトルにあるように、「教会の承認なしに」結婚した末に生まれた子どもの将来を考えると、ホールデンは胸を締めつけられる思いであったのだと推測できるのである。

#### 4. 国策としてのメムサーヒブ

前述のような社会浄化運動によって、異人種間結婚は徐々に恥ずべきこととして考えられるようになったが、19世紀に至っても、英国人官吏などが現地で愛人を囲うことは、大英帝国拡大のための性的な力学として認められてゆくことになる。そうした女性たちは「ビビ」(bibi)と呼ばれ、インドの言語および諸情報についての知識を身近に教えてくれる“sleeping dictionary”として、イギリス植民地官僚のバンガローの一部を宛がわれることは当たり前のごとく行われていた (Baron, 107)。

だが、帝国存続のためには、支配人種に性的な自己抑制が必要であり、支配者たるイギリス人は、現地人から超然としているべきだと考えられるようになってくる。1857年に起

こったインド大反乱が、この動きのひとつのきっかけとなった。インド人に対してイギリス側に生まれたこれまでの共感のある種の嫌悪感へと変化させ、両者の間には新たな障壁が築かれた。

在印イギリス人の目からみれば、インド人女性は英領統治という男たちの仕事に対する潜在的な障害物となりうる。彼女たちは男を仕事から逸らす力があまりにも強いため、官吏や軍人などから形成される英国人のホモソーシャルな結束を揺るがす最も恐ろしい潜在的脅威となりかねないからである。ゆえに現地人女性と内縁関係を結ぶことは避けて、イギリス人妻を迎えるべきとの考え方が次第に優勢を占めるようになっていった。こうした在印イギリス人女性を指す「メムサーヒブ」(Mem Sahib)は、英語のマダム (Ma'am=奥様) とアラビア語のサーヒブ (sahib=主人) を合成したヒンディー語で、現地人が既婚の西洋婦人と呼ぶときの呼称であるが、『オックスフォード英語辞典』(OED)においてこの語の初出が1857年のインド大反乱の時であり、この翌年からイギリスによるインドの直轄統治が始まることを考えても、メムサーヒブは「主に直轄統治時代の在印イギリス人女性を指すものとして使われた語」(スレーリ, 391)であると言える。

メムサーヒブは、男たちを現地の女性たちの誘惑から遠ざける性的な基準を維持するための政治的な機能を果たしていた。ロナルド・ハイアムは、支配者と被支配者間の「社会的距離」を保つことは、とりわけインド大反乱以後、政策として意図されていたのであり、メムサーヒブたちがそのための道具であったことを指摘している(164)。「妻として、彼女たちはインド人情婦の消滅を早め、女主人として彼女たちはどの居住地区でも閉鎖的な社交グループを作り上げることに手を貸した」(Ballhatchet, 5)。こうした新たな社会浄化運動と共にイギリスとインド間の意識が懸

隔していくにあたり、避暑のための駐屯地で生活するイギリス人妻たちの増加が決定的な役割を果たしていく。「避暑のための駐留地はメムサーヒブたちの砦だった」(ハイアム, 162)。

キプリングの物語中にも、こうした避暑のための駐留地を表す「ヒル・ステーション」に言及した部分が出てくる。飢饉や熱病やコレラについてのより詳しい情報を得ようとホールデンが地方長官に尋ねると、地方長官は「特定の地域に限られた食糧難と季節的な病気が例年になく流行しているだけだ」とはぐらかし、そのあと、こう言っている。

“You’re a lucky chap. You haven’t got a wife to send out of harm’s way. The hill-stations ought to be full of women this year.” (Kipling, 2001; 226-7) (下線部引用者)

「今年ヒル・ステーションは女たちでいっぱいになるはずさ」という、この地方長官の何気ない言葉はもちろん、コレラの危険から身を守るために、男たちがヒル・ステーションというインド北部丘陵地帯の避暑のための駐在地に妻を避難させることで、イギリス人女性の数が増えるだろうということである。だが同時にこの言葉は、それだけ多くの女性たちがイギリスからインドに渡ってきていたことも示唆している。またこうした女性たちは、「すべてが既婚者だったわけではない」(ハイアム, 162)といわれ、キプリング自身も、インドの高原避暑地シムラでの滞在時に「夫探しをするきらびやかな女性たちの集まり」について日記の中で言及したことがあるという指摘もある (Wilson A, 107-108)。

当時のこのような国策としてのメムサーヒブの存在は、キプリングの作品に少なからぬ影を落としている。アミーラはホールデンと同国人の女性たちに対して、殊更に嫉妬心を

あらわにする。この女性たちは、キプリングのテキストでは「メム・ログ」(mem-log)となっており、アミーラが発する言葉の中で「あなた(ホールデン)と同じ血族の白人女性たち」と説明されている。上記のメムサーヒブが、現地人からみたヒンディー語による白人女性の呼称であることはすでに見てきたが、「メム・ログ」の‘log’もまた、‘people’を意味するヒンドゥースターニ語を英語に音訳したものであり、複数名詞を作るための接尾辞として例えば‘sahib log’というように用いられる (Macleod, 226) とあるので、キプリングにおける「メム・ログ」も、これと同じ文脈で捉えることができる。

## 5. アミーラのインディアンネス

ホールデンが「ユーラシアン」である息子トウタの将来を真剣に考えるようになるかなり前に、アミーラが子どもの将来について次のような発言をしている。

‘... there is a bond and a heel-rope [peecharree] between us now that nothing can break. Look—canst thou see in this light? He is without spot or blemish. Never was such a man—child. Ya illah! He shall be a pundit—no, trooper of the Queen. (Kipling, 2001; 216)

アミーラは、トウタが将来「インドの賢者」(pundit)となるだろうと言ったあと、すぐに「いえ、女王陛下に仕える軍の騎兵となりましょう」と言い直している。英国人であるホールデンに気を使ったとも解釈できるこのアミーラの発言は、実は、「ユーラシアン」である自分の息子が、父親と同じ職業に就けるわけではなく、軍においては将校の位からは除外される対象であることを彼女が自覚していることを表していると考えられる。

物語の冒頭から、アミーラは、自分がホールデンの奴隷であり召使い以外の何者でもないことを繰り返し言っている。彼女が「異人種間結婚に対するイギリス的な態度を完全に受け入れている」(Meyers, 60)表れであろう。

イスラム教徒の娘としてこの世に生を受けたアミーラは冒頭から敬虔なイスラム信仰者として描かれる。ホールデンとの間に身ごもった子どもが男の子であるよう、イスラム教の教主バドルの聖堂に幾晩も祈りを捧げ供物を届けたのだと証言し、子どもの運勢をパターン・モスクの先生(イスラム法学者)に占ってもらふ。ついに男児を出産したアミーラの次のような発言がある。

‘He is of the Faith,’ said Ameera; ‘for lying here in the night-watches I whispered the call to prayer and the profession of faith into his ears. And it is most marvelous that he was born upon a Friday, as I was born. (Kipling, 2001; 216)

「この子は信仰の賜物です」と言うアミーラの言葉は、つまり「この子はイスラム教の信者」であるということの意味している。子どもはアミーラと同じ「金曜日」に誕生した。金曜日は、イスラム教徒にとって、モスクに集いアッラーに祈りを捧げる集団礼拝を行う重要な曜日である。彼女は眠れぬ夜に、イスラムの「祈りの言葉や信仰告白を、子どもの耳にささやいていた」と説明されている。

注目すべきは、イスラムの「信仰告白」である。シャハーダとして知られるイスラム教徒が行う「信仰告白」は、「アッラーの他に神はなし。ムハンマドはアッラーの使徒なり」(リズン, 211)という文言から成り、彼らにとって最も重要な言葉とされる。この告白の前半部分は、神の唯一性を認めることの、そして後半部分は、ムハンマドを使徒として認めることの表明であり、入信のときだけでは

なく礼拝の度ごとに唱えられるもので、キプリングの別の短編「恐ろしい夜の街」(“The City of Dreadful Night”)において、この信仰告白の言葉が以下のようにある。

Again and again; four times in all; and from the bedsteads a dozen men have risen up already. —“I bear witness that there is no God but God.” (Kipling, 1994; 151) (下線部引用者)

祈祷時刻を声高く呼び知らせるムアッジン<sup>1</sup>の呼び声に応えるように、男たちは信仰告白の言葉を唱える。アミーラが我が子の耳元に囁き続けた「信仰告白」は、上記の文言であった可能性が高い。

しかし興味深いのは、アミーラは物語の中間盤から、ムハンマドのみならず、聖母マリアにも祈りを捧げたと証言している。そして、彼女が死に際にホールデンの耳元で囁く最後の言葉は、次のように、明らかにイスラム教の信仰告白を言い換えたものになっているのである。

“... Remember me when thy son is born—the one that shall carry thy name before all men. His misfortunes be on my head. I bear witness—I bear witness—the lips were forming the words on his ear—“that there is no God but thee, beloved!” (Kipling, 2001; 229) (下線部引用者)

このように彼女が臨終の際に発した言葉は、“God”が“thee”に入れ替わることによって、彼女の心の中でホールデンが絶対的な主人の地位から神聖な神の地位へと変わっていることを示している。その神聖なる神とは、彼女だけが崇拜の対象としアッラーの神にすら取って代わる神、すなわちホールデンなの

である。「彼女の最後の言葉は、伝統的なイスラム教の信仰告白の冒険的な読み換えになっている」(Meyers, 60) とさえいえる。

ホールデンを愛するようになったアミーラは、常に白人のメモ・ログたちに強い嫌悪感を示している。彼女たちにホールデンを奪われる恐怖を露わにするアミーラの感情は、単なる嫉妬とは別に、現地の女性たちがメモサーヒブにかつての地位を取って代わられてきた時代背景と結び付けて考えることができる。彼女は「まったくの無知」(Tompkins, 101)な女性ではない。自らが置かれた現実を心得た「洞察力のある人物として描かれている」(Gilbert, 1965; 37) ののである。

## 6. おわりに

美しさを湛えたアミーラと萎びた老婆として描写される母親。母娘の差異は、朽果ててしまうのがぞっとするほど容易い東洋の美の「オリエンタリズム的ステレオタイプ」(Sullivan, 97) となっている。娘を「魔王にでも売り飛ばしかねない」貪欲な母親と、制度上さまざまな恩恵を有する白人のメモ・ログ——「本質的な人間の愛を放棄してしまったような人物たち」(Gilbert, 1972; 57) に囲まれたアミーラは、ひととき情熱的に愛を貫く存在として際立つ。

だが、アミーラが生きたのは、異人種間結婚が19世紀初頭までに実質上終わりを告げ、狂信的ともいえる社会浄化運動により、「イギリス人官吏にとって、婚姻が最も重要な社会的関係」(本田, 140) となっていた時代である。このコンテキストにおいて、彼女が白人のメモ・ログたちに抱いた感情は、当時の「植民地統治下にあるインド人女性の心情」(Bloom, 51) そのものであった。つまりアミーラは、「教会の承認なしに」ホールデンと結婚することの意味を、「ホールデンよりも現実的」(Gilbert, 1972; 36) に理解していたと

同時に、自分自身の置かれている立場を自覚していたのではないだろうか。

また、緻密な階級構造の中に生きていた植民地政庁の官吏としてのホールデンは、アミーラとの愛に満ちた生活にどれほど癒されようとも、インドという無秩序の中に唯一秩序を見出せるクラブという空間を必要とした。それは、彼が、イングリッシュネスを喪失してしまいそうな恐怖に苛まれていたからではないのだろうか。

ホールデンの二重生活は、結局、トウタとアミーラがコレラに罹って死に至ることで終わりを告げた。彼らが愛を育んだ家は無人化し、雨季が訪れたことで瞬く間に朽ち果てて、その後様子を見に行ったホールデンは、この家を取り崩すことになる家主から告げられる。英国人は「イギリス本国(ホーム)以外のところに「家」(ホーム)を持つことは許されない」(Nagai, 17) のであり、彼らの愛によって、イギリスとインドの文化が融合することはなかった(Annan, 111) のである。

### [注]

- (1) ホールデンが「警察官 police officer」(Macmunn, 151) であると指摘しているものもある。
- (2) 北原 66-67 においても、現地官吏が破格の扱いを受けていたことが説明されている。

### [引用文献]

- Annan, Noel. "Kipling's Place in the History of Ideas." Andrew Rutherford. Ed. *Kipling's Mind and Art*. California: Stanford University Press, 1966: 97-125.
- Ballhatchet, Kenneth. *Race, Sex and Class under the Raj: Imperial Attitudes and Politics and Their Critics, 1793-1905*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1980.
- Baron, Archie. *An Indian Affair*. Pan Macmillan, 2001.
- Bloom, Harold. Ed. *Bloom's Major Short Story Writers: Rudyard Kipling*. Philadelphia: Chelsea House Publishers, 2004.
- Gilbert, Elliot L. *The Good Kipling: Studies in the Short Story*. London: Manchester Uni-

- versity Press, 1972.
- . “Without Benefit of Clergy’: A Farewell to Ritual.” *Kipling and the Critics*. New York: New York University Press, 1965: 171-76.
- Harrison, James. *Rudyard Kipling*. Boston: Twayne, 1982.
- ヒューズ, クリスティン『十九世紀イギリスの日常生活』植松靖夫訳, 松柏社, 1999年
- 本田毅彦『インド植民地官僚 — 大英帝国の超エリートたち』講談社選書メチエ, 2001年
- ハイナム, ロナルド『セクシュアリティの帝国 — 近代イギリスの性と社会』本田毅彦訳, 柏書房, 1998年
- Islam, Shamsul. *Kipling’s ‘Law’: A Study of his Philosophy of Life*. London: Macmillan, 1975.
- Kipling Rudyard. “The City of Dreadful Night,” in *Collected Stories*. Ed. Robert Gottieb. London: Everyman’s Library, 1994.
- . “Without Benefit of Clergy,” in *Selected Stories*. Ed. Andrew Rutherford. London: Penguin Books, 2001.
- 北原靖明『インドから見た大英帝国 — キプリングを手がかりに』昭和堂, 2004年
- Macleod, R. D. *Impressions of Indian Civil Servant*. London: H. F. & G. Witherby LTD., 1938.
- Macmunn, George. *Rudyard Kipling-Craftsman*. London: Robert Hale Limited, 1938.
- McBratney, John. *Imperial Subjects, Imperial Space: Rudyard Kipling’s Fiction of the Native-Born*. Columbus: The Ohio State University Press, 2002.
- Meyers, Jeffery. “Thoughts on ‘Without Benefit of Clergy.’” Harold Bloom. Ed. *Bloom’s Major Short Story Writers: Rudyard Kipling*. Philadelphia: Chelsea House, 2004: 59-63.
- Nagai, Kaori. *Empire of Analogies: Kipling, India and Ireland*. Cork: Cork University Press, 2006.
- Ricketts, Harry. *The Unforgiving Minute: A Life of Rudyard Kipling*. London: Chatto & Windus, 1999.
- リズン, マリーズ『イスラーム』菊池達也訳, 岩波書店, 2004年
- Shahane, Vasant A. *Rudyard Kipling: Activist and Artist*. Southern Illinois University Press, 1975.
- スレーリ, サーラ『修辞の政治学 — 植民地インドの表象をめぐる』川端康雄・吉村玲子訳, 平凡社, 2000年
- Sullivan, Zohreh T. *Narratives of Empire: The Fictions of Rudyard Kipling*. Cambridge: Cambridge University Press, 1993.
- Tompkins, J. M. S. *The Art of Rudyard Kipling*. London: Methuen, 1959.
- Wilson, Angus. *The Strange Ride of Rudyard Kipling: His Life and Works*. London: Secker & Warburg, 1978.
- Wilson, Edmund. “The Kipling that Nobody Read.” Ed. Andrew Rutherford. *Kipling’s Mind and Art*. California: Stanford University Press, 1966: 17-69.



[Abstract]

Double Life under the British Raj in India:  
The Case of Kipling's "Without Benefit of Clergy"

Mikako AGEISHI

The story "Without Benefit of Clergy" is regarded by most critics as the best of Kipling's tales of interracial love. Its title refers to the 12<sup>th</sup> century legal exemption that protected English clergymen from criminal prosecution, though the phrase in Kipling's story describes ironically the marriage, however unblessed by clergy, of an Indian girl and an English official under the 19<sup>th</sup> century British raj in India. This paper examines the protagonist's double life in British India, considering the historical context about intermarriages and how intimate sexual and social relations between Englishmen and Indians came to be discouraged. It also focuses on "mem-log," white women whom the Indian girl hates in the story, by comparing them to the "mem-sahib," the British women who were politically sent to India to control the sexual desire of British officials.